

別紙 I の文章を読み、問いに答えなさい。

問一 線部 A「細い糸を□」ように・B「努力を□」に最もふさわしい動詞を次の各ア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- A「細い糸を□」ように B「努力を□」
- ア つかむ
 - イ さぐる
 - ウ ひっぱる
 - エ たぐる
 - ア 持つ
 - イ 買う
 - ウ 測る
 - エ 知る

問二 線部①「それ」の指すものを本文中から十六字でぬき出し、最初の五字を答えなさい。

問三 線部②「後ろ髪をひかれる思い」とは、「□」ではどういう気持ちか、具体的には説明しなさい。

問四 線部 a～d から、線部③「□」とは別の場所を指すものを一つ選び、記号で答えなさい。

問五 【1～4に最もふさわしい語を次のア～カから一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

- ア みるみる
- イ とうとう
- ウ わざわざ
- エ しぶしぶ
- オ だんだん
- カ いやいや

問六 線部④「最初はよかれと思ってそうしたはずの少年」とありますが、「少年」は「最初」はどのように思っていたのか、解答らの言葉に続くように答えなさい。

問七 ⑤に最もふさわしいことわざを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 井の中の蛙大海を知らず
- イ 郷に入れば郷に従え
- ウ 住めば都
- エ 猫の額

問八 線部⑥「□」に入る言葉を、本文の語を組み合わせて、五字で答えなさい。

問九 線部⑦「この子に時間をあげたくなってしまう」とはどういうことか、解答らの言葉に続くように答えなさい。

問十 線部⑧「向こう側とこちら側の視点が一瞬ふっと入れ替わる」とはどういうことですか。「カナブン」を例に挙げて、具体的に説明しなさい。

問十一 線部⑨「その生涯がそのまま民話とっていいような人」とはどういう人か、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア その土地に生きるものと深く関わりあいながら生きていた人。
- イ ずっと昔からその土地で英雄として語りつがれてきた人。
- ウ 生まれてから死ぬまでその土地を離れずに暮らし続けた人。
- エ 語り伝えられてきたその土地の物語をよく知っていた人。

問十二 線部⑩「風景」の□に入る漢字を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 限
- イ 現
- ウ 原
- エ 元

問十三 線部⑪「おばあちゃんが私にくれた一番の宝物」について、

- (1) 「おばあちゃんが私にくれた一番の宝物」とは何か、本文全体から読み取って説明しなさい。
- (2) その「宝物」は、現在の筆者の仕事においてどのように生かされているか、わかりやすく説明しなさい。

(裏に続きます)

二 別紙 II の文章を読み、問いに答えなさい。

問一 ①に入る季節を漢字一字で答えなさい。

問二 線部 a 「叱りでもするような調子で」から、線部 b 「かわいそうに思いました」というように、小娘の気持ちが変わったのはなぜか、説明しなさい。

問三 二か所の A に入る言葉を、漢字一字で答えなさい。

問四 線部 ② 「うなだれた首」とは、何の、どのような様子を表しているのか、答えなさい。

問五 線部 ③ 「はからず」の意味として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ためらいなく
- イ わけもなく
- ウ 思いがけなく
- エ まもなく

問六 線部 ④ 「宣告するように」とはどういう意味か、最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア はつきりと言いわたすように
- イ やさしく教えたとすように
- ウ こっそり打ち明けるように
- エ この先の無事をいのように

問七 線部 ⑤ 「心配しなくてもいいのよ」と言った小娘にはどのような考えがあったのか、答えなさい。

問八 ⑥に最もふさわしい言葉を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 負けん気
- イ 乗り気
- ウ 生意気
- エ うつり気

問九 線部 ⑦ 「今度はあなたが苦しいわ」とありますが、このように言う菜の花の気持ちを説明しなさい。

問十 線部 ⑧ 「取り合いません」の言いかえとして最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 気にしません
- イ 相手にしません
- ウ 争いません
- エ 答えません

問十一 線部 ⑨ 「菜の花はこわこわいしました」とありますが、なぜ「こわこわ」なのか、説明しなさい。

問十二 線部 ⑩ 「花も葉も色がさめたようになって」とは、人間でいうとどのような様子を表したのか、答えなさい。

問十三 線部 ⑪ 「菜の花も笑いました」とありますが、このときの菜の花についての説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分を助けてくれた小娘への感謝を、笑うことで示そうとした。
- イ 小娘に笑われてくやしかったので、平気なそぶりをみせたかった。
- ウ いぼ蛙とあやうく顔をぶつけそうになったことがおかしくて笑った。
- エ 小娘の笑い声を聞くうちに、今の出来事をゆかいに思うようになった。

三 次の問いに答えなさい。

問一 次の文中のカタカナを漢字に直して書きなさい。

- (1) 提案の カヒ を論じる。
- (2) 最後の場面は アツカン だった。
- (3) 実力を ハツキ する。
- (4) 知らない場所で ウオウサオウ する。
- (5) 異文化を ジュヨウ する。
- (6) 商品を イチリツ に値上げした。
- (7) カンチョウ になると海面から岩が現れる。
- (8) 「かえるのうた」を リンショウ する。

問二 次の文中の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- (1) 定石どおりに戦いを進める。
- (2) かげで画策する。

ある晴れたしずかな①の日の午後でした。一人の小娘が山で枯枝を拾っていました。

やがて、夕日が新緑のうすい木の葉をすかして赤々と見られる頃になると、小娘は集めた小枝を小さい草原に持ち出して、そこで自分のしよって来た荒い目籠に詰めはじめました。

ふと、小娘は誰かに自分が呼ばれたような気がしました。

「ええ？」小娘は思わずそういつて、起つてそのあたりを見まわしましたが、そこには誰の姿も見えませんでした。

「私を呼ぶのは誰？」小娘はもう一度大きい声でこういつて見ましたが、やはり答える者はありませんでした。

小娘は「三度そんな気がして、はじめて気がつく、それは雑草の中からただ」と本、わずかに首を出していた小さな菜の花でした。

小娘は頭にかぶっていた手拭で、顔の汗をふきながら、

「お前、こんな所で、よく淋しくないのね」といいました。

「淋しいわ」と菜の花は親しげに答えました。

「そんならなぜ来たのさ」小娘は、叱りでもするような調子でいいました。すると菜の花は、

「ひばりの胸毛について来た種がここでこぼれたのよ。こまるわ」と悲しげに答えました。そして、どうか私をお仲間の多いふもとの村へ連れて行って下さいと頼みました。

小娘は、かわいそうに思いました。小娘は菜の花の願いをかなえてやろうと考えました。そしてしずかにそれをAから抜いてやりました。そしてそれを手に持って、山路を村の方へ下って行きました。

路に添うて青い小さな流れが、水音をたてて流れていました。しばらくすると、

「あなたの手はずいぶんほてるのね」と菜の花はいいました。

「あつい手で持たれると、首がだるくなってしかたがないわ、まっすぐにしていられなくなるわ」といつて、うなだれた首を小娘の歩調に合わせて、力なく振っていました。

小娘はちよつと当惑しました。しかし小娘には、はからず、いい考えが浮びました。小娘は身がるく路はたにしがんで、だまって菜の花のAを流れへひたしてやりました。

「まあ！」菜の花は生きかえったような元気な声を出して小娘を見上げました。すると小娘は、④宣告するように、

「このまま流れていくのよ」といいました。

菜の花は不安そうに首をふりました。そして、

「先に流れてしまつとこわいわ」といいました。

⑤心配しなくてもいいのよ、そういいながら、早くも小娘は流れの表面で、持っていた菜の花をなしてしまいました。菜の花は、

「恐いわ、恐いわ」と流れの水にさらわれながら、見る見る小娘から遠くなるのを恐ろしそうに叫びました。が小娘はだまって両手を後へまわし、背でおどる目籠をおさえながら、かけて来ます。

菜の花は安心しました。そして、さもうれしそうに水面から小娘を見上げて、なにかと話しかけるのでした。どこからともなく気軽な黄蝶が飛んで来ました。そして、うるさく菜の花の上をついて飛んで来ました。菜の花はそれをもたいへんうれしがりました。しかし黄蝶はせつちで、⑥でしたから、いつか又どこかへ飛んで行ってしまいました。

菜の花は、小娘の鼻の頭に、ポツポツと玉のような汗が飛び出しているのに気がつきました。⑦今度はあなたが苦しいわ」と菜の花は心配そうにいいました。が小娘は

「心配しなくてもいいのよ」と答えました。菜の花は、叱られるのかと思つて、黙つてしまいました。

間もなく小娘は菜の花の悲鳴に驚かされました。菜の花は流れに波打っている髪の毛のような水草に、根をからまれて、さも苦しげに首を振っていました。

小娘は息をはずませながら、「まあ、少しそうしてお休み」といつて傍の石に腰を下しました。

「こんなものに足をからまれて休むのは、気がわるいわ」そういいながら、菜の花は、なおしきりにイヤイヤをしていました。

「それで、いいのよ」小娘はいいました。

「いやなの。休むのはいいけど、こうしているのは気がわるいの。どうにかちよつとあげて下さい。どうか」と、菜の花は頼みましたが、小娘は、

「いいのよ」と笑つて、⑧取り合いません。

が其のうち水の勢で、菜の花の根は、自然に水草からすり抜けて行きました。そして、不意に、

「流れるうー」と大きな声をして菜の花は又流されて行きました。小娘もいそいで立ち上ると、それを追つて駆け出しました。

「やつぱりあなたが苦しいわ」と、菜の花はこわいこわいしました。

「何でもないので」と小娘もやさしく答えて、そうして、菜の花に気をもませまいと、わざと菜の花より、三間先を駆けて行くことにしました。

ふもとの村が見えて来ました。小娘は、

「もうすぐよ」と、声をかけました。

「そう」と後で菜の花が答えました。

しばらく話はたえませんでした。ただ流れの音にまじつて、バタバタ、バタバタと小娘の草履で走る足音がきこえていました。

チャポーンという水音が、小娘の足元でしました。菜の花は死にそうなる悲鳴をあげました。小娘は驚いて立ちどまりました。見ると菜の花は、

⑩花も葉も色がさめたようになって、

「早く早く」とのび上つています。小娘は急いで引き上げてやりました。

「どうしたのよ」小娘はその胸に菜の花を抱くようにして、後の流れを見まわしました。

「あなたの足元から何か飛び込んだの」と菜の花はどうきがするので、言葉を切りました。

「いぼ蛙なのよ。一度もぐつて不意に私の顔の前に浮び上つたのよ。口のがつた意地の悪そうなの、あのかつばのような顔に、もう少しで、私はほつたをぶつける所でしたわ」といいました。

小娘は大きな声をして笑いました。

「笑いごとじゃあ、ないわ」と菜の花はうらめしそうにいいました。「でも私が思わず大きな声をしたら、今度は蛙の方でびっくりして、あわててもぐつてしまいましたわ」こういつて、⑪菜の花も笑いました。

間もなく村へ着きました。小娘はさつそく自分の家の菜畑にいつしよにそれを植えてやりました。

そこは山の雑草の中とはちがつて、土がよく肥えておりました。菜の花はどんどのび育ちました。

そうして、今は多勢の仲間と仲よく、しあわせに暮らせる身となりました。

*三間先——一間は約一・八メートル。

(志賀直哉『菜の花と小娘』より)